
Silent World

Red Rain

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

S i l e n t W o r l d

【Nコード】

N 7 9 9 6 0

【作者名】

R e d R a i n

【あらすじ】

蓮杜と秀介は戦争が長く続く国に生まれた。

二人は16歳になり狙撃学校を卒業してペアの狙撃班になった。

自らの「死」の意味を求め苦しむ二人と

他者の「死」に「生」を見出し苦しむ「魔女」

戦場で出会った二人と魔女は

果たしてどんなような「解」に辿り着くのか・・・

第一夜 - 赤と灰の世界 - (前書き)

この小説は「実在する地名および武器の名前・性能や特徴」を使用しています。

また本作は第二次世界大戦中のスターリングラード攻防戦をモデルにしています。

第一夜 - 赤と灰の世界 -

第一夜 - 赤と灰の世界 -

「なあ俺たち何のために生まれてきたのかな・・・」
と誰かが言った。

しかし誰も答えない。いや答えられないといった方が正しいか。
彼らは今から戦地に向かう。薄暗い明け方の道を行くトラックの荷台には
常に死の芳香が漂っていた。

彼らはまだ18歳にも満たない少年兵だ。長く戦争の続くこの国にはもう余裕がない。
中には女の子なんかも混じっている。

「私たちどこに配属されるんですか？」

女の子の一人が怯えながらも監視の兵士に尋ねる。

「お前たちの配属は第65偵察小隊 場所はスターリングラードだ。
質問は？」

と兵士は答えた。同時に何人かは泣き出す。

「せ、戦況はどうなんだよ？」

青ざめた表情の青年が兵士に尋ねた。

「お前らも聞いているだろうが、連日敵の狙撃兵に将校や通信兵がやられてる。お前らの任務はその狙撃兵を探し出して潰すことだ。」

簡単に言っていると戦況は最悪 だということだろう。

皆が下を向いている中でただ一人例外がいた。

上を向いてヨダレを垂らしながら寝ているのでとても目立つ彼の名前は岩城蓮杜 この中では唯一狙撃学校から来ている隣には彼の観測手の如月秀介が下を向いて座っていた。

「なあ蓮杜 俺たち死ぬのかな・・・」

秀介が寝ている蓮杜にしゃべりかける。

「・・・・・・・・・・」

寝ているのか、無視しているのかどちらにせよ反応がない。

「よく寝ていられるなこんな時に！」

先ほどの青年が怒った口調で叫ぶ。

「ああコイツはそんな奴なんだ気にしないでくれ。」

秀介は慣れた様に切り返した。

「気にするなだど？目障りなんだよ！そういうバカみたいな奴はよ！」

青年は秀介に掴みかかった。

「もうやめてよ！こんな時に・・・」

さっきの女の子が嫌気がさしたように叫んだ。

「なんだと！？このクソ女が！」

今度はその女の子に掴みかかる。

「おいっ騒がしいぞ！静かにしろ！」

監視の兵士に銃を向けれて一瞬で静かになった。

やがてトラックが止まり兵士が叫ぶ

「着いたぞ！全員降りろ！」

そこは鳴り止まない銃声と砲声 漂う硝煙と血の匂いが鼻を突く灰色の世界。

トラックから降りた各小隊が短い説明を受けている
主に基地内の案内と配属部隊の確認なのでほんの数分で説明は終わ
った

皆が宿舎に戻ろうとしたときだった。

「第65偵察小隊はここに残ってくれ。」

年老いた兵士が言った。

他の隊が宿舎に引き払ったあと年老いた兵士は言った。

「長旅で疲れているところ悪いが、早速任務だ。地図を見てくれ。」
全員がのろろと地図を広げた。もう文句をいう気力もないようだ。

地図はスターリンググランド全体の地図で縦にアルファベット 横に
数字で区切られていて
さらにX軸とY軸の座標で細かな位置を表現する方式のようだ。

「君たちはこれから座標D3X4Y5に向かってもらう。」

年老いた兵士は急に語調を強くして言った。

「そこには何が？」

小隊のどこからかそんな声がした。

「廃病院がある。ついでに敵の狙撃兵が潜んでいる。ここ3日間で
8人やられた。」

「つまりそれを殺せと？」

秀介が面倒くさそうに言った。

「そうだ。出発は30分後。君たち用に装備を用意してある取りに来たまえ。」

そついわれて皆が年老いた兵士に付いていったので蓮杜と秀介も後に続こうとしたが

不意に後ろから呼び止められた。振り返ると先ほどのトラックに乗っていた

監視役の兵士が手招きしている。

「おい、お前たちに武器と装備が送られてきてる。俺に付いて来い。そついわれて二人は監視役の兵士についていった

「お前たち・・・狙撃学校から来たんだろう？どうだ？」
兵士は歩きながら二人に問いかけた。

「どうだとは何がですか？」
秀介が聞き返す。

「自信はあるのか？その敵の狙撃手をやれる。」

「どうだ？蓮杜。」

「さあ。」

蓮杜は面倒くさそうに吐き捨てた。

「だ、そうです。」

と秀介は答えた。

すると兵士は急に向き直り

「二日前に俺の兄がやられたんだ。頼む！奴を殺してくれお願いだ。」

と涙を流しながら懇願した。

「まあ最善は尽くしますよ。」

秀介は後味の悪い思いをしながらそう答えた。

その後しばらくは3人無言で歩き続けた。

やがて二人は倉庫に入れられ武器を手渡された。

「狙撃手はこっちのケース。観測手はこっちのケースだ。」

兵士はそういつて二人に大きなケースを渡した。

中身は狙撃手にはM21にMEUピストル観測手にはUMPにMEUピストルだ

M21はセミオート式で10発装填 遠距離ではボルトアクション式に劣るものの市街地では速射性を生かして優位に立てるだろう。

そのまま部屋を出て行こうとした二人を先ほどの兵士が呼び止めた。
「さつきはすまなかった。死ぬんじゃないぞ あとな魔女を見たらすぐに逃げるんだ。殺されるぞ。」

「魔女？」

例によって秀介が聞き返す。

「なんだ知らないのか？ 帽子に黒い羽をつけた敵の狙撃手だ。もう何十人もやられてる。」

「それはどこにいるんだ？」

珍しく蓮杜が食いついた。

「さあな・・・なにしろ神出鬼没でやられたっていう情報はそこら中から聞いている。」

「楽しそうな情報をありがと・・・じゃそろそろ時間だし行きますか」
秀介が皮肉交じりに話を切り上げて戻ろうとしたとき蓮杜が言った。

「そうだ例の殺された兄の名前は？」

兵士は少し動揺しつつも答えた。

「秋山・・・秋山周作・・・」

「了解。」

蓮杜はそれだけ言って部屋を後にした。

次回へ

第一夜 - 赤と灰の世界 - (後書き)

概要執筆中

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7996o/>

Silent World

2010年11月9日03時11分発行